



Title	第7章 アイヌであることと被差別経験
Author(s)	菊地, 千夏
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 31, 116-130
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54993
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_31_04_27.pdf



第7章 アイヌであることと被差別経験

菊地 千夏 | 旭川大学短期大学部助教

はじめに

本章では、伊達市のアイヌの人々へのインタビューと、和人である伊達市民へのインタビューを分析対象として¹⁾、アイヌの人々の生活史における被差別経験を見ていく。

われわれがこれまでに別の地域を対象に行った調査のなかで、現代のアイヌ差別の特徴は明らかになりつつある（小内編著 2012; 小内編著 2013）。たとえば、ライフコース上でみれば、学校、職場、結婚という場面にほとんどの差別エピソードが集約されてくる。この時世代別で様相が異なり、およそ老年層（60～70歳代）からは「アイヌ、アイヌ」といったからかいやあからさまな差別経験が語られやすいものの、壮年層（40～50歳代）では親世代のそういった苦しみをふまえてか、差別が抑制されていたり、そもそもアイヌであることを告知されてこなかったりしたパターンが目立ってくる。そしてその結果、青年層（20～30歳代）ではアイヌに関する知識が自他ともに相対的に低く、被差別経験がないという者が多数派になっている。ここには当然、社会全体でアイヌと和人の混血が進み、「アイヌ」とは誰か／何かが曖昧になってきていることも関係しているだろう。現代では20歳代以下の若い世代において、アイヌというエスニック・アイデンティティを誇りに思い、むしろ主張する存在が一部で認められるように、アイヌ差別は世代の移り変わりによって消滅する可能性すらあるといえる。

差別の内容に関しては、性別による差異が見られる。アイヌの身体的特徴である体毛の濃さがあげられることが多く、必然的にとくに女性にとって切実な悩みとして語られやすい。また、結婚の際は、当人同士は意識していなくとも、家族や親族からアイヌとの結婚が疎まれる事例がないわけではない。

地域差については、これまでの札幌およびむかわでの調査（小内編著 2012）、新ひだかでの調査（小内編著 2013）を見比べると、はっきりとした違いが浮き彫りになっているわけではない。道内のアイヌ集住地域における先行研究のなかには、偏見や差別の認知度は、アイヌの人口比率が高いところほど低いという調査結果がある（松本・石郷岡・太田 1995）。だが札幌とむかわを比較した時に、札幌ではアイヌの人数が圧倒的少数になることによって学校等でいじめが起きやすい状況が見られ、さらに、アイヌの割合が多いむかわでも上の世代から伝えられる典型的なアイヌ差別（「あ、犬」など）が把握できている（菊地 2012）。こうした知見に加え、和人からのアイヌ差別のみならず、血の濃さに依拠したアイヌ民族内での差別が存在することも指摘されている（濱田 2012）。

このように、アイヌ差別は世代、性別、地域といった視点でいくつかの特徴が把握できつつあり、民族内外をめぐって構造化できる段階にもある。これらを踏襲し、本章では伊達市の地域性を明らかにすることを目的に、アイヌ差別の実態を分析していく。

第1節 生活史における被差別経験

第1項 アイヌである人々の語りから

新ひだか調査の分析方法にしたがい（菊地 2013:38）、まずアイヌであることによる被差別経験の有無から見ていく。

伊達市においては、全体の36.8%が差別された経験があると語っている（表7-1）。男女差はほとんどなく、どちらも全体平均と同様に4割弱にとどまる。新ひだか調査では全体の50%に被差別経験がうかがえたため、伊達市ではそれよりも低い結果となった。世代別では、年齢が低いほど被差別経験の割合が少なく、高齢になるにしたがって高くなっている（表7-2）。これは新ひだか調査とも同様の傾向であり、世代的な傾向は似通っているといえる。加えて、青年層の20歳代において被差別経験がまったくないという点も、新ひだか調査と同様の結果である。

表7-1 被差別経験（男女別） 単位：人

	あり	なし	合計	差別の経験率（%）
男性	5	8	13	38.5
女性	9	16	25	36.0
計	14	24	38	36.8

表7-2 被差別経験（世代別） 単位：人

		あり	なし	合計	差別の経験率（%）
青年層	20歳代	0	3	3	0.0
	30歳代	1	5	6	16.7
壮年層	40歳代	2	6	8	25.0
	50歳代	3	4	7	42.9
老年層	60歳代	4	3	7	57.1
	70歳代	4	3	7	57.1
計		14	24	38	36.8

（1）青年層（9人中被差別経験者1人<以下、同様>）

さらに詳しく、語りの内容を見ていこう。

まず青年層においては、ただ1人の女性から被差別経験が語られる。9名中8名が一様に差別されたことはないとするなか、この女性のエピソードは具体的な方である。彼女は、小学校から中学校にかけて、そして社会に出てもやはり「アイヌ」、「アイヌでしょ」といったことを言われ続けた。町のなかでは同世代や上の世代の人たちから、「アイヌだ」と指差されて、汚い、感染する、寄るな、すごかったですね、「もう臭いから寄るなとか、そういう汽車乗ってても、みんな白い目で見るみたい。顔でもうわかるみたい、そんな感じですね。顔で判断される」と語る。「子どもって残酷なもので」と振り返り、いじめにより中学1年生以降、不登校にもなった。当時住んでいた地域について、「私以外にもいじめられていた人いましたから」「有珠はとくにすごかった」と述べる。

ここまで明確な差別を受けたという事例は本データ全体からみれば希少なものである²⁾。先に見たように、新ひだか町と比べ伊達市のアイヌの人々には被差別経験が相対的に少なく、後述していくが、内容も深刻なものが多いとはいいがたい。しかし、この女性のように伊達においてもアイヌ

であることを理由に差別を経験した者が存在し、しかもそれが比較的若い世代であることに留意しておく必要はあるだろう³⁾。

とはいえ、20歳代の3名すべてと30歳代の6名中5名が差別はなかったと語っており、こちらが多数派である。世代的に周囲でアイヌ差別が少なく、また自らも経験していないため、差別を経験したことはあるかとの問いに戸惑いを見せる者もいる。これは比較的若い世代に広く共通していることでもある。

(2) 壮年層×男性 (2人中1人)

以下、被差別経験者が少しずつ増えるため、世代と男女別に見ていく。

壮年層の男性は、まず調査対象者自体が2名と少なく、このうち1名に被差別経験が見られた。しかし彼によれば、アイヌを理由にしたからかいが「1回くらいあったような、同級生から」という程度のもので、具体性には乏しい。

壮年層に該当するもう1名の男性は、「おれの代でいじめられたとか、そういうのは一切ない」と語る。自分より20歳くらい上の世代から聞いた話では、夕張に出かけた際、「アイヌが来てる」ということで仕事終わりに子どもたちがたくさん集まってきて、自分の風貌を見に来たということであった。また、1つ年上のアイヌの先輩からも、かつて小学校教師が授業中に昔のアイヌ居住区の話をしたことがあり、「いま思えば、頭くる話だ」と聞いたけれども、やはり自分の体験ではない。こうした事例から、青年層同様、壮年層においても自らの被差別経験が語られることはあまり多くない。彼はさらに以下のように語る。

たぶん(差別を)気にした世代ったら、僕らより本当、20年以上、上だと思いますよ。だから、たまに上の知り合いの漁師のおじさんなんだけど、話したらやっぱりたまたま出ますね。「おれはこうこう、こうされた」とか。「おれの時はなかったから分からないよ」とかって。(略)

まあ、わからないよ。実際自分がそういう立場に遭ってたら、いまどう思っているのか分からないけど、もう僕らの時はそういうのがなかったから。実際そういうふうにならされても、それに逆らうだけの力もあったから。個人として弱い立場ではなかったからね。

(男性/被差別経験なし)

彼の場合、「逆らうだけの力もあった」、「個人として弱い立場ではなかった」と述べているが、過去のアイヌ差別を伝え聞いているとしたらなおさら、現在、差別されるようなことがあっても構えの態度を取ることが可能であろう。

(3) 壮年層×女性 (12人中5人)

壮年層の女性になると、数は違うものの壮年層男性と割合的には変わらず、約半数に被差別経験が見られる。事例が多い分、内容もやや具体的となっている。

ある女性は教育、就労、結婚のすべてのステージで差別を経験しており、和人との付き合いであまり良い思い出はないと語る。学生時代はアイヌの子どもがいじめの標的になることが多く、「いじめられるばかりの人と、『何を』って言って立ち向かっていく人と、いろいろでした」という。

結婚する時には和人である向こうの家から、『アイヌの人なんて働かないんだもの。嫁さんにもらったってどうしようもないだろ』っていうのを言われた。それは彼女自身、「昔のアイヌの人は、みんな働かなかった」、「私たちが小さい時は、何か周りのみんなそんな感じで、昼間からお酒を飲んでたりとか、仕事が休みの時とかはそういう人が結構いた」という認識であり、義父母の先入観を覆そうと「一生懸命頑張った」という。夜の仕事をしていた時にも、「年配のお客さんとかは、やっぱり60、70代の方は、そういうのでちょっと意地悪を言う人もいました」とのことである。

別の女性は、アイヌ民族の多い有珠地区で育ったため、子どもの頃はいじめられることも、自分をアイヌだと意識することもほとんどなかった。しかし大人になってから、道外出身の結婚相手の家から「ちょっと偏見の目はあった」。親戚は「たまにバカにしたような感じのことを喋るから、『そうか、バカにされることなんだな』って思った」という。ここからまず、アイヌ民族が多数となる地域では差別が起きにくいこと、そして、道外の人からによるアイヌ差別を確認することができる。

また、結婚時の周囲の反応は従来からよくあげられるものの一つであるが、本調査ではこの2名の語りにとどまった。どちらも女性であることから、小野寺（2012:91）が指摘する「結婚について女性が抱えていた悩みや苦労は男性よりも継続的かつ深刻といえる」という傾向にあてはまる。ただ、その悩みが継続するような事例は見られないため、語られる被差別はこれまでの調査と比べるとあまり根深さを感じないものである。

先の女性は仕事のなかで「ちょっと意地悪」を言われたと語っているが、就労の場での差別は、ライフコース上において語られる頻度は高くない。

そうしたなか、看護師として働く女性から以下のようなエピソードがあげられてはいる。

仕事上で患者さんから「触るな」と言われたりする。小さい頃は感じなかったが、働くようになってから（アイヌであることを）意識させられるようになった。

仕事でつらいのは、患者さんから拒否されること。自分では感じていなくても、患者さんの方で感じている。そういう患者さんには、無理にはできない。なだめながら関われる時と「嫌だったんだね」ということで他の看護師さんに代わってもら場合とある。

（女性／被差別経験なし）

この女性は「患者さんから拒否される」というふう述べるものの、差別されたという認識は持っていない。それは子どもの頃からいじめや差別の経験がなく、恋愛や結婚においてもアイヌであることをまったく意識したことがなかったという生活史と関係しているように思われる。アイヌであることと被差別の認識は密接な関係にあり、互いに影響を及ぼすものとしてみなすことができる。

他方、アイヌであることに否定的な感情を抱き、かつ、「ずいぶんいじめられ」たとして涙ながらにこれまでを振り返る女性もいる。

私たちは毛があるとかないとかで、ずいぶんいじめられてずっとやってきているのね、この50年。もちろん私の娘もそうだと思うし。（略）

毛があって何か得することがあります？ ないでしょう？ 損をすることしかないって。色が黒

くて毛深くて、あとは何があるの？（略）

私の娘もアイヌじゃない人と一緒になって生まれてきた孫がどうしてこんなに毛深い子が生まれたんだろうって、その時本当に思いましたよ。でも仕方がない、その子に授かったんだから。今は学校に行っているから一生懸命にやっているようだから面倒を見ているけれど、そういうので離婚される時もあるのね。血筋が違うとか、本当に正直な話、女の人だったらそういうふうに悩んでいるんじゃないかと思っている。別にアイヌだからって大手を振ってという生き方は今まで一回もなかった。

（女性／被差別経験あり）

体毛の問題は必ずあげられる悩みであり、女性が自分だけでなく、その子孫のことを気にする様子もよく見られる。アイヌの人々が身体的特徴を理由に差別を受け、さらにアイヌであることへの否定的な自認から、人生の機会を狭め、生活に支障をきたしているとするならば非常に深刻な問題である。この女性は体毛を気にするあまり、病院への受診にも引け目を感じているという（「私はこの年になったけれど、でも正直病院には行きたくない。具合が悪くても行かない。行かないで市販の薬を飲んで、そんな足だとか体とかを絶対見られたくないと思って、ずっと生きてきている」）。

同じような悩みはアイヌの夫をもった和人女性からも語られており、死別した夫は「誰にこの毛を見せるんだ」と言ってとうとう医者に行くことはなく、毛だらけで「なんで猿が来たんだ」と言われるから、家から出たがらなかったと語る。こうした体毛を理由にした悩みは、もはや性別や地域を問わず、アイヌ民族が抱える被差別問題と見る必要がある。

以上のように、壮年層の女性になってくると従来見られたようなライフコース上の差別エピソードが増え、体毛の濃さに関する語りも切実さを増してくる。ただし、全体の半分に当たる対象者が被差別経験はないと語っている点も忘れてはならないだろう。

（4）老年層×男性（6人中4人）

老年層では、はじめて被差別経験がある者の方がいない者の数を上回ってくる。とはいえ、露骨に差別を受けたという語りはあまり多くはない。

幼少期から有珠に住んでいるという1人目の男性は、「人にちょっと（見）下げられた時に」アイヌであることを意識するものの、「だけどおれの隣近所も結構いる」、「おれの友だちも結構アイヌがいたから大したことねえんだ」と語る。差別されたとしても、同じ境遇の者が身近にいる場合、あまり深刻な悩みとしては意識されないことがわかる。

2人目は、中卒後に室蘭市で就職し、5年間そこで働いた。職場では「はっきり言ってくれば一番いいけれど」、「目に見えないというのがあるでしょ、雰囲気で」というように、肌で差別を感じ取ったことがある。だが同時に、アイヌとしての「自分自身に誇りを持っている」と述べ、差別的な眼差しにも屈しない姿勢がかいま見える。

3人目の場合、「内地（千葉県）で仕事してた時は」、「やっぱり少しは差別された」。しかしそれは、アイヌや琉球民族は仕事の技術面で劣るという根拠のない偏見であり、技術面で負けないように、差別されないようにと、むしろ仕事に打ちこむきっかけになったという。

4人目の男性もアイヌへの「差別はあった」というが、この男性は当時の状況について、「朝鮮人」

への差別の方が「すごかった」と語る。

「朝鮮、朝鮮」って言われてね。ここね、案外、アイヌっていうものを差別しないところ。なぜかというとな、アイヌが多くいたから。たくさんいたから。朝鮮人は少なかった。朝鮮の混血とか。そうすると、そういう者をいじめるわけよ。ね。あの頃、本当にね、ガキの頃でも見てて可哀想だと思ったもの。「朝鮮、朝鮮」って。したら反発しないの。いじめられればいじめられ通し。俺言ったことあるもの「あんまりお前ら、いじめるなや」って。

それからだいぶいくなつたけどもね。可哀想だったよ。朝鮮人っていうのも。朝鮮の籍の。母親日本人で父親が朝鮮人とかっていうの。ここではすごかった。アイヌはなに、大威張りさ。数多いから。
(男性／被差別経験あり)

アイヌよりも数の少なかった「朝鮮（人）の混血」への差別の方が深刻だったという状況は、すでにわれわれの調査のなかで把握されてきた（菊地 2012:150ほか）。差別はより少数の者に対しより酷なものになるという傾向は地域が違っていても共通している。

以上のように、老年層男性の語りでは、アイヌ差別の割合は増えるものの、全体的にあまり悲観的に捉えられてはいないというのが特徴としてある。また、有珠地区ではアイヌ民族が多いため差別が起こっても「大したこと」ではなく、市外や道外において差別や偏見を持たれる場合があることを確認できる。

ところで、壮年層女性、老年層男性に見られた道外で生じるアイヌ差別はかつての知見と異なる。菊地（2012）では、東京では差別がないためアイヌの集いや活動に積極的に参加できたけれども、札幌に戻ってきてからは差別を恐れてアイヌであることを周囲に話すことすらできないという青年の事例があった。

この違いをふまえて改めて解釈すると、青年が東京でアイヌであることを積極的に表現できたのは、東京がアイヌ以外のエスニック・マイノリティもある程度存在する地域であること、東京での集いのなかに道内で被差別経験のあるアイヌの同志がいたこと（菊地 2012:148）の影響が大きいと考えられる。東京での集いのメンバー間にはアイヌとしてのアイデンティティを支えあう仲間意識もあるだろう。しかし、本調査でみられた道外出身者からの結婚差別、職場での差別は、対象者が和人社会のなかに個人として置かれた状況で生じたものであり、自らのアイデンティティを保持するのは難しい。また、道外で不特定多数のなかの1人になってしまえば差別は起きにくいかもしれないが、結婚による家族形成の場や職場という私的な領域になると、「アイヌであること」にふれられる可能性も当然高まる。こうしたことから、道外では生活のなかの公的領域ではアイヌ差別を感じにくい反面、私的領域では差別をこうむる可能性もあると再解釈できる。

(5) 老年層×女性（8人中4人）

最後に老年層女性の語りに着目しよう。結論からいえば、女性の場合も差別があっても自らのアイヌとしてのアイデンティティを否定するまで思い悩むような語りがあるわけではない。

ある女性は、学生時代の教師からの差別経験を振り返る。

1回だけ、中学校の先生が。就職を先生に、子どもだから「どこか(就職先)ないですか」ってお願いするじゃないですか。その時に、たった一言言われたの。それでカチンときたんですけど。私みたいな子どもに、「あなたアイヌ民族だから」(って言った)。だからどうなのってこと。「アイヌ民族だから自覚しろ」ってということなのかわからないけど。「(アイヌ民族) だからね」っていうふうに言われたんですよ。

(女性/被差別経験あり)

後にも先にも、具体的な被差別経験はこれだけだという。しかし加えて、同じ職場のアイヌの人と「目での差別はあるよね」と会話することがあるという。東京(道外)に行った時は一切感じないけれど⁴⁾、ここ(伊達)では「眼差しの差別」というべきか、アイヌである自分を見られているとを感じる。こうした直接何かされるわけではないものの、「肌で感じる差別」というものは老年層男性たちの語りにも共通していた。

残りの被差別経験のある女性たちを見ると、差別は「子どもの時くらいで、後は全然私がたはアイヌだからって気にもしない」というふうに楽観的な場合や、「アイヌ、アイヌって言ってた人はいるよ。私らも陰では言われていたと思う」けれども、「実際(面と)向かって言われたことはない」ために、やはり深刻な記憶としては語られない事例が目立つ。

先の女性と同じように中学校教師から差別を受けたという別の女性は、教師の子どもに「お前の親は悪魔だ」と言って、仕返しをしたと語る。差別には「負けてなかった」と振り返り、アイヌであるからといって萎縮してしまう様子はうかがえない。

以上のように、アイヌとしての対象者全体の約4割に見られた被差別の内容を見ると、アイヌであることによる差別を受けた人々は存在するものの、だからといって悲観的になったり、結婚や就労など、その後の人生に消極的になったりしていく様子は決して多くはないというのが特徴としてあげられる。また、これまでの道内調査と違う点として、道外での被差別経験の語りが散見された。これは、道内で被差別経験の少ない伊達地域だからこそ、道外でのちょっとしたできごとが被差別としてのエピソードにあがってきたとも考えることができる。

第2項 和人である人々の語りから

では伊達市に住む和人としての立場から見た場合、アイヌ差別はどのようなものか。

新ひだか調査では、アイヌとの結婚を避けたがる和人男性の事例のほか、比較的年長世代からの漠然とした偏見(アイヌの人はでたらめ、いいかげん、酒癖が悪い、喧嘩すると気が荒いなど)が目についた(菊地 2013)。

伊達調査においては、まず、「ここに今住んでいて、近くにアイヌの方がいるのを感じない」(老年和人男性)、「アイヌと和人というように実際にわけて考えたことがない。身近にアイヌがいないのでわからない」(老年和人女性)といった意見が主流をなしている。「有珠には先祖で漁師をしているアイヌが多いが、伊達市内はアイヌの人はいない」(老年和人男性)と語られることもあるように、有珠以外に住む住民にとってはアイヌといわれてもぴんと来ない場合が多いようである。ある男性は以下のように語る。

伊達で限定すると、伊達の人で、今40代以下で伊達に「アイヌがいた、いる」的な発想を持っている人は誰もいないと思う。いたとしてもおそらく何パーセントくらいかと思う。いまさらアイヌと言われても、極端なことを言うと、小、中学生だったら、「アイヌって何」というくらいになっている。

(老年和人男性)

このように、アイヌそのものについて考えたり、地域のなかにアイヌの人々が暮らしていることを意識したりする世代自体が少なくなっている。それゆえ、若い世代になると、アイヌに対し「特別に何かというのは感じていない。アイヌに対する関心がまわりの人もなくなってきているような気もする。いい意味では差別がない。登別でも厚真でも伊達でも差別的なことは感じたことがない」(青年和人女性)のである。アイヌへの関心の有無はまた別問題だが、そもそもアイヌと和人との区別ができないくらいに、「今、アイヌの人は町の人に同化している」(老年和人男性)と考える者が少なくない。

つまり、アイヌであることがわからないかぎり、差別も起きようがないということになる。老年層のある和人女性が語るには、周辺地域にアイヌの人々が多く住んでいるのはわかっているものの、アイヌの人は自分からアイヌであることを公言しない。まわりの人が「あの人はアイヌだ」と教えてくれるという。周辺ではアイヌのことを「ヌー」と表現し、彼女自身は「嫌な言葉」だと述べる。ただ、「ヌー」という言葉を用いる人も差別的な意味をこめてというよりも、親世代からの刷り込みが大きいのではないかということである。女性は、「アイヌだと言われるとああそうなんだと思うくらいで、言われるまでは何も感じない」と語る。この事例から、アイヌだということがわかるとその後、それなりに意識はしてしまうことを想像できるが、かといってその認識が差別意識へと変化していつているわけではないのである。

他にも、過去の記憶として、小中学生の頃にアイヌのクラスメートに対して「あ、イヌだ」といったからかいがあったという話(青年和人女性)や、「昔はアイヌと結婚するとなると何か悪い人と結婚するような見方があった」(老年和人女性)と語られることはある。しかしやはり、こういったエピソードを持つ者が現在差別意識を持っているわけではない。

自分のなかに差別意識がない理由について、「小さい時からアイヌの友だちとの交わりがあったから、人種差別もなく話ができている」と感じている和人女性(老年層)もいる。彼女はアイヌに対して、「交流がなかったら、ちょっとこう・・・というのがある。交流が昔からあるのでそういう差別する気持ちはないのだと思う」とも述べる。この語りは、もしこれまでにアイヌとの交流がなかったら、差別意識を持っていた可能性もあると読むことができよう。

だが、これまでみてきたように、「ヌー」という蔑称が唯一の具体的なものといっていいほど、和人の語りのなかにアイヌ差別を見出すことは困難であり、実際に、蔑称が強い差別意識をともなって発せられているわけでもなさそうである。

ただし、アイヌ民族への資金援助に疑問を感じている住民はいる。それは、「(アイヌ民族への)教育に対しての補助は偏見だと思う」、「アイヌの人たちもそういう制度があるから、それに甘んじている」(老年和人男性)といった語りに象徴的である。こうした学資補助に加え、有珠で漁師をしていたという和人男性(老年層)は、漁協に支援金が下りてきた際にも、使えるのはアイヌのみだっ

たと語る⁵⁾。こうした経験からこの男性は、アイヌ文化を有形のものとして残していくことには賛成しているが、アイヌの人々の生活支援として予算をつけるのには難色を示し、「自立の妨げになるのでは」と考えている。

このように、伊達市の和人住民の語りのなかにアイヌ差別を見つけ出すのは困難である。その際、地域のなかでアイヌと和人の同化が進んでいるとの意識が高いことから、今後はより一層、現代アイヌへの資金援助について不満や疑問を持つ割合が高まっていくのではないだろうか。

以上までの検討をふまえると、アイヌと和人双方の語りにおいて、アイヌ差別が強く浮かび上がってこないというのが伊達市の特徴である。こうした傾向は、これまでの札幌、むかわ、新ひだかでの調査とやや様相を異にしている。

たとえば札幌調査では、体毛の濃さを異性に指摘されたことを契機に、その後、男性との付き合いが怖くなってしまったアイヌ女性の事例があった。また、むかわ調査でも、和人からのアイヌ差別を「虐待」という言葉で表現し、トラウマになっているものとして語る男性がいた（菊地 2012）。さらに新ひだか調査では、アイヌであることを子どもに告知する際に、今後、子どもが差別をこうむらないかどうかを考慮し、迷い、心労する親たちの様子が印象的であった（菊地 2013）。もちろん伊達調査でも、冒頭にみた差別の言葉を浴びせられ不登校になった女性の事例や、身体的特徴のコンプレックスをあげ、涙ながらにアイヌであることの生きづらさを訴えた女性のような事例もあった。しかし、そうした個別エピソードがかすんでしまうほど、全体の傾向として被差別経験が根深いものではなかったということを指摘しておきたい。

第2節 血筋の告知と被差別経験

第1項 アイヌの血を引く立場からその子孫へ

再びアイヌの人々に目を向け、血筋の告知状況と被差別経験の有無の関係を確認しておこう⁶⁾。表7-3を見ると、子どもを持つ対象者27名のうち、子どもにアイヌの血筋を告知しているのは18名であり、全体の6割強にあたる。被差別経験の有無にかかわらず、子どもにアイヌであることを告知している割合が優勢といえる。ただし、子どもが乳幼児という場合も含まれる青年層では、まだ理解できる年齢ではないという理由で告知していない事例も目立ち、実際、誰も伝えてはいないという。

しかし若い親たちには、今後の告知に関してどちらかといえば積極的な姿勢を見せる者が多い。2歳と3歳の子どもの持つ30歳代男性は、「たぶん小学校とか中学校になったら、本人がそういうのに興味を持つと思うので、聞かれたらひいひい爺ちゃんが、と」いうかたちで伝える予定だという。同じく幼児をもつ20歳代女性も、アイヌの血筋は「伝えると思います」と回答しており、自分が父親から教えられた時のように、「お墓参り」の際に伝えたいと述べる。彼らに共通しているのは被差別経験がないという部分でもあり、告知に関しても迷いは感じられない。

子どもの方から血筋について聞かれた事例もある。

子どもたちが中学の頃かな、夏休みに本家に行った時、2人に「お母さん、僕たちアイヌ人なの？」って聞かれたんですよ。「そうだよ、お母さんはアイヌの血を引いている」と言ったら「ふ～ん」

と言って、ふたりとも全然気にしていないみたいです。全然違和感はないみたいです。

(老年層女性／被差別経験なし)

表7-3 血筋の告知×被差別経験

●：告知している ○：告知していない

被差別経験あり	壮年	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもに言っているから幾らか分かっているとは思いますが、でも私と同じような性格だから別に気にしてないと思います。アイヌの顔をしている子、誰もいないです。本人たちだってほとんど薄いからあまり。(50代女性)の顔をしている子、誰もいないです。本人たちだってほとんど薄いからあまり。(50代女性) ●たまたま友達とか、私の友達もそうなんですけれど、結構顔の濃いのがいるので、そういうので「アイヌじゃないか」というあれで、「いや、おまえたちもだよ」というので。今はそんなに昔ほど差別意識というのはないので、普通に自然に受けとめてました。上の子どもたちの同級生にもそういう人が何人かいたので、「ああ、おれもなのか」、「私もなのか」という感じで。とくに私たちが子どものときのような嫌な感じというのはいないです。(40代女性)
	老年	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校中はやっとかわいそうだから、中学校入った頃教えてるよ。血、入ってるよって。ばあさんがそうだから。なんも。ケロツとしてたよ。俺らがアイヌって覚えた時よかケロツとしてたよ。子どもたちになったらほとんど友達もみなもう混ざってるから、自分がアイヌだってわかるのなんかなんぼもない。(60代男性) ●「アイヌの血は入ってるんだよ」というのはチラッとは言った事あると思いますけど、事細かに丁寧に説明はしてませんね。高校生になってから私がこういう仕事をしたのでわかったと思います。(60代女性) ●(子どもはアイヌの家系だと)わかっているよ。ばあちゃんがいた時から、幼稚園の時から言っていたから。(60代男性) ●子どもにはもう教えてたから、よその人をね、まだひどい人もいたからね、その頃はね。だから、あんた方アイヌなんだから、アイヌと言ったらだめだよということは、(小学2〜3年齢の頃に)教えました。(70代女性) ●私の方から言わなくても、自分たちから、俺たちアイヌだよなって、子どもたちのほうから質問されました。抵抗なく、アイヌはアイヌだからいいよって。なんもお前たち、和人に悪いことしてるわけじゃない。自分は自分でアイヌだからって、いばってアイヌになるように教えました。(70代女性) ○子どもたちにアイヌ民族について詳しく教えたことはない。(70代女性)
被差別経験なし	青年	<ul style="list-style-type: none"> ○伝えると思います。いつだろうね(笑)。やっぱお墓参りが一番…。いいんじゃないかな。(20代女性) ○たぶん小学校とか中学校になったら、本人がそういうのに興味を持つと思うので、聞かれたらひいひい爺ちゃんが、というぐらいですかね。(30代男性) ○言っていないですね。(今後の告知をどのように考えているか?) どうだろう。聞かれたら答えるぐらいかな。(30代男性) ○子どもにはとくにアイヌであることを言っていないが、(アイヌ協会などから?) 手紙が来るので何となく感じていると思う。(30代女性) ○多分そのまま、私たちが見てたように子どもたちも見て、サラッと。別にこう、かしこまって教えて貰うとかっていうわけじゃなくて、そういうお祭りがあつたら行って、そういう民族衣装を見たりだとか、そういうのはあるのかもしれないけど。私自身もとくにそういうのをわかっていないので、かしこまってこう伝えるって事は無いと思うんですよ。これから先も。(30代女性)
	壮年	<ul style="list-style-type: none"> ●(告知した意図は?) いや。別に言っていないと思います。事実なんだから。いじめとかも私、なかったから。(40代女性) ●子どもには高校くらいの頃に、アイヌであるということだけを伝えてる。子どもはテレビを見てアイヌのことは知っていると思う。伝えた時に、子どもたちは「んー?」という感じの反応で、あまりピンときていないようだった。(40代女性) ●薄いけど入ってるよというか。お兄ちゃんは、毛深いからというわけじゃないけど、結構、毛深いんですよ。子どもは全然気にしてないです。(50代女性) ●子どもには小学校でアイヌ民族のことを勉強する時に、アイヌの血が流れていることを伝えた。小学校高学年くらいだったと思う。子どもは「ああ、そうなんだ」という感じの反応だった。(50代女性) ●子どもたちはウタリ対策の支援を高校の時に受けたので、アイヌであることはわかっている。子どもたちは「あ、そうなんだ」という感じ。(50代女性) ●きっかけはねえ、なんだろうねえ。学校で勉強するようになったのかな。アイヌのことを。(その時にあなたも血筋を引いてるんだよっていうことを?) そんな感じだね。(50代女性) ●○上の子(高校生)は聞いてくるから、普通に喋ってます。昨日も喋ったけど。アイヌってどういうあれなのとか、和人ってどういうあれなのって。でも下の子(中学生)は何も聞いてこないからそのままですね。(40代女性) ○うちの親とかもそんなにアイヌの血が、ほとんど薄いみたいな感じで言われていたので、とくに告知とかする気はないかなみたいな。(40代女性)
	老年	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもたちが中学の頃かな、夏休みに本家に行った時、ふたりに「お母さん、僕たちアイヌ人なの?」って聞かれたんですよ。「そうだよ、お母さんはアイヌの血をひいている」といったら「ふ〜ん」と言って、ふたりとも全然気にしていないみたいです。全然違和感はないみたいです。(60代女性) ●「アイヌの血が入ってるよ」というだけで、それ以上の事は(言っていない)。今こころ辺、そんなに差別とか無い、もって昔はあったんだろうけど。(60代女性) ●子どもにはアイヌであることを伝えた。伝えたと言っても自然とわかることだと思う。(70代女性) ●教えてるよ。(それはお子さんが小さいときに?) そう、そう。(70代男性) ○伝えるということよりも分かっているから、何も言うことはないと思ってるからこっちらから何も言わない。(70代女性)
和夫人・和夫妻	壮年	<ul style="list-style-type: none"> ●一応「おじいちゃんがそうだった」という話をして、「お父さんがハーブなら子どもたちはクォーターだね」なんて言うぐらいで。なのでとくに子どもたちもアイヌの血筋を引いているからどうのこうのという考えはないみたいです。「えっ、クォーター?」とかと言って笑っている感じです。(笑) (40代女性) ●(自分の父親がアイヌだということは)高校時代からもうわかってたからね。嫌う人は嫌うけどね。うちは全然そんなの無い。(50代女性) ●チセを見に行った時に、「これはパパが作ったんだよ」と言って、「これは何?」と聞くから、アイヌの人たちが昔からしていたことだよ、とか。あとはバチラー教会とかのカタカナ語ですね、アイヌ語を嫁さんのお父さんがきてそういう言葉を教えてもらったりしていましたね。(40代男性) ●息子が高校卒業して進学するときに、うちはこういう家庭だからこういう制度を利用して学校に行くことができるんだよっていう話をして、そのときにうちはアイヌの家庭だから、お父さんのほうのおばあちゃんおじいちゃんっていうのはアイヌなんだよっていう話をしたら、すごいびっくりした顔して。「知らなかった?」って言ったら、当然何て言うんだろう、大人の感覚で言う顔立ちもそうだし、親戚のおじいちゃんおばちゃんもそうだから、なんとなくわかってるんだろうと思っていたら、全然感じてなかったらしくて、びっくりして「そういうこと知る機会がなかった」って言ってました。(50代女性) ○(改めて伝えているわけではない?) ではない。(けど子どもたちは知っている?) ですよ。と思う。だってこれの、何かをいただいて助かってるっていうのはわかっているから。(50代女性)

老年	<ul style="list-style-type: none"> ●娘も息子も孫たちもそういうの全然考えてないです。一応言っておいてあるんだけど。(どんなふう?)「そういうあれがあるよ」ということです。「だから、そういう人のことをばかにしたりしたら駄目だよ」ということをね。(子どもたちは)何ともないですね。(60代女性) ●アイヌっていうよりは「あいのこ」だよっていう事は(言った)ね。おやじがアイヌで私がシャモだから、「あいのこだよ」っていう事ね。(70代女性) ○いや、言ってないです。別にそんなことは言わない。わかっていると思うけどね。(あえて伝えることもないという?)うん、伝えなかったな。(60代男性) ○子どもたちにアイヌ民族であることは伝えたことがない。伝えなくても学校に入ると、2世だから「アイヌ、来た」といういじめが始まった。子どもは、何も話さなかったが、アイヌであることが、いじめられる原因となり苦痛だったと思う。学校では有珠で海水浴をするが、思春期になると毛深いので海水着が着られなかった。子どもたちには何も伝えていなかったから、6年生になって白老への修学旅行から帰って来ると、「お父さん、今日アイヌ見て来た」と言った。(60代女性)
----	---

彼女は続けて、子どもたちが違和感なく血筋を受け入れたのは、「きっと母親が(アイヌであることを)卑下してないということが子どもにもちゃんと伝わっているのではないかと分析している。ここまで明確に語られている事例は少ないが、本調査において、血筋の告知の際の逡巡があまり見られないのは、前節で見えてきたように、生活史のなかに被差別経験が少ないということも関係しているのではないだろうか。

ただし、新ひだか調査の時と同様に、告知に慎重になる事例がないわけではない。「小学校中はちょっとかわいそうだから、中学校入った頃(に)教えてる」という男性は、その理由について次のように語る。

あんまり早く教えてしまえば卑屈になったら困るなど思っただけ。自分もたまにあつたから、子どもにそんなことさせたらかわいそう。あれだけけろっとしてるなら最初から教えておくべきだった。
(老年層男性/被差別経験あり)

この男性は、あからさまなものではないが学生時代に和人から、「たまに馬鹿にされて喧嘩したこともある」。やはりこうした経験が基盤となって、子どもへの告知の時期をずらしたと考えることができる。また、早くに告知することによって「卑屈になったら困る」と考えていることから、自分自身を卑下してしまうかもしれないという可能性への憂慮もうかがえる。しかし結果的に子どもは「けろっとして」いたということであり、子ども世代との「アイヌであること」の受けとめ方のずれが見て取れる。こうした親たちの告知をめぐる悩みや迷いは新ひだか調査において特徴的であった(菊地 2013)。

他にも、「子どもは全然気にしていない」、「『ああ、そうなんだ』という感じの反応」、「私たちが子どもの時のような嫌な感じというのではない」という語りなどからわかるように、全体的に波風の立つような告知の状況は語られていない。

第2項 和人としての立場からアイヌとしての子孫へ

最後に、配偶者がアイヌという和人夫/和人妻の立場に目を向ける。本調査の中で対象に含まれた9名はすべて親としての立場である。したがって自分自身は和人でも、その子どもはアイヌの血を引くため告知しなければならぬ状況は生まれてくる。

再度、表7-3を見ると、告知しているのは9名中6名であり、3分の2になる。対象は壮年・老年層のみとなったので、この世代のなかだけで比較すれば、自分自身がアイヌの血筋という場合

よりも告知していない割合がやや高い。

内容を見ると、告知の仕方は具体的な印象を受ける。たとえば、アイヌ協会から学資補助を受けられるのを機に、「うち是这样い（アイヌの）家庭だからこういう制度を利用して学校に行くことができるんだよってという話をし」という事例はわかりやすい（壮年和人女性）。その際、子どもたちは「知る機会がなかった」とびっくりしていたというのも、若い世代に特有の反応であろう。この家族はずっと有珠地区に住んでいるということだが、有珠ではアイヌ民族が多いといっても、「知る機会」がなければわからないほど、生物学的にも文化的にも和人との同化が進んでいると考えられる。

さらに子どもが告知を笑って受けとめたという事例もあり、アイヌのハーフと和人の子どもであることを「クォーター」として認識させたパターンである。この和人女性（壮年層）が語るには、父親がアイヌと和人の混血なので、子どもの世代は4分の1のクォーターであるという伝え方をしている。クォーターという言葉を強調することによって、それがアイヌの血筋であるということ子どもの方も深く考えないようである。上の事例と同じように和人との同化が進むことによって、今後はアイヌであることが自分のアイデンティティに強く影響しなくなっていくのであろう。

以上のように、和人である場合にはアイヌの血筋であることを客観的に捉えることができるため、伝え方も明確で理性的な傾向にある。

逆に、和人の親としての立場の中で、「子どもたちにアイヌ民族であることは伝えたことがない」という老年層の女性は、「伝えなくても学校に入ると、『アイヌ、来た』といういじめが始まった」ため、「子どもは、何も話さなかったが、アイヌであることが、いじめられる原因となり苦痛だったと思う」と語る。彼女の子どもは毛深い方だったので、その後、社会人になってからも銭湯でつらい思いをしたようである。「俺だけがじっと立って見られる。そのせつないことな」との発言に、なんとも返答できなかった。こうした場合、自分がアイヌとしての立場であれば、ただ単純に謝ったり、自分の体験談をふまえて苦労をわかち合ったりすることもできる（菊地 2013:48）。しかし和人である彼女の場合は、「何でお母さんアイヌと一緒にあったんだ」と責められることに尻込みしてしまった。また、「自分で自ら感じて、自分はみんなと違っているのだということが自然にわかった方がショックもないと思っていた」。

この事例からわかるのは、和人の親としての立場もそれはそれで告知に思い悩むことがあり、結局言えずじまいになる親子関係もあるということである。彼女の夫は彫りが深い顔立ちで、体毛も濃い方であり、「アイヌであることはみじめだから、自分の歴史は言いたくない」という考えの持ち主であった。夫婦ともに血筋の告知には消極的であったといえる。こうしたことから、アイヌの身体的特徴が強い時には世代や性別、地域にかかわらずアイヌであることに否定的な感情を持つことが多く、生活のなかで差別をこうむっている可能性も高いといえるのではないだろうか。

第3節 まとめと考察

以上、伊達市に住むアイヌと和人双方のインタビューにもとづき、アイヌ差別に関するトピックを中心に検討してきた。

従来の札幌、むかわ、新ひだかでの調査と比較した時、伊達においても同じような被差別経験は把握できるものの、それらが象徴的に浮かび上がってくるほど、全体的な傾向としての被差別の語

りは根深くないというのが伊達の地域的特徴と指摘できる。アイヌ民族内で差別しあうことや、自分自身を卑下するような民族内差別の語りが無いに等しい状況もこうした見方を強めている。実際にインタビュー調査員としてのわれわれの感覚でも、差別の話を受けない、内容が深まっていかないうのが手ごたえとしてあがっている。

この根拠となりそうなものとして、先行研究においても、伊達に特徴的なアイヌと和人の関係性が指摘されている。少し長いですが、1995（平成7）～1996（平成8）年に伊達市でアイヌ調査を行った大黒（1997）、大黒（1998）の知見を以下に引用する。

「伊達地域の歴史には、アイヌ民族と和人との激しい衝突や抗争が見られない。少なくとも、集団どうしの対立として大きなものは伝えられていない。蝦夷三官寺の一つである善光寺（浄土宗）がアイヌの人びとへの仏教教化に努め、この地のアイヌの人びとが次第に旧来のカムイ信仰から離れていったことがその背景にある。また、入植の指導者邦成は、有珠に支配所を開庁した際に、先住のアイヌの人びとの生活を乱さないよう布告を出して臣下に注意を与えた。（…中略…）有珠周辺の和人とアイヌの人びととの関係は、記録を見る限り、概ね平和的であったようである。」（大黒 1997:74；大黒 1998:165。原文の注釈を省略した）

大黒によれば、伊達市においてアイヌ協会の会員世帯は大多数が有珠地区に居住しているとのことであり、それはわれわれの調査でも同様であった。たしかに本稿のなかでも、有珠に住んでいるために自分がアイヌであることを意識したことがなかったり、差別を受けてもさほど気にならなかったりといった様子は確認できた。だが一方で、数少ないながらも語られた被差別経験は同じ有珠地区で起きているものでもあり、冒頭のアイヌ女性のように、「有珠はとくにすごかった」というまさに正反対の語りもある。これらをふまえれば、伊達市も道内の別の地域の傾向と同じように、程度の差はあれ、アイヌの人々が一定数集住しているからこそ和人と分け隔てなく生活しているという側面と、アイヌの人々が一定数おり、しかも昔から集住する地域であるがゆえに上からアイヌ差別が継承されやすく、現在でも差別が残存するという側面のどちらもがみられる地域として捉える必要がある。ただし、道内の他の3つの地域一札幌、むかわ、新ひだかーと比較すれば、被差別経験の割合も、内容の程度も目立って深刻ではないというのが伊達の特徴ということができる。

ところで、大黒は上記の文中に次のような注釈をつけている。

「しかし、こうした一面で良好に見える和人／アイヌ関係も、まったく対立や葛藤のないものではなかった。バチラー八重子は、有珠を一步離れた幼いころの伊達本町はアイヌ差別の場であったと記している。」（大黒 1997:101；大黒 1998:193）

われわれの調査では、アイヌとしての対象者に有珠以外の伊達での生活歴があっても、そこでの被差別経験は把握できなかった。一方、伊達市に住む和人からは、地域生活のなかで、アイヌか和人かの区別をすることがないとの声が多く、かりにアイヌの人がいるとわかったところで差別意識が芽生えているわけでもなかった。このようにデータが断片的であるため、今回の調査から、現在の有珠以外の伊達市の傾向を確認することはできない。ただし、アイヌと和人という2つのエスニ

シティが存在する地域社会のなかで、エスニシティが少数となる側への差別が強まることを考慮すると（松本・石郷岡・太田 1995）、有珠以外の伊達市内に住むアイヌ民族はエスニシティを隠蔽して生活をしている可能性が強いと考えられる。というのは、現実的に、アイヌへの生活補助に対する和人たちの反感は強いのであり、アイヌ協会に加入する割合が少ない有珠以外の伊達在住のアイヌたちは、アイヌであることを公言しているとは考えにくい。伊達市の生活館のうち、有珠以外の黄金生活館と稀府生活館が廃止されたのも、それを物語る事例かもしれない。有珠以外の地域ではアイヌの人が存在しなくなったのではなく、アイヌであることを表明する者が少なくなり、利用者が減った結果、生活館の廃止につながったとも考えることができる。このような意味で、少なくとも有珠に住むアイヌ民族の傾向としては被差別経験が少ないという結果であるが、それが伊達市全体の特徴とは断定できないというのが本稿での知見である。

ただし最後に、本調査においてそれぞれの被差別経験が根深くないとはいっても、「眼差しの差別」が語られる頻度は少なくなかった。それは日常生活のなかでふとした時に感じる主観的なものである。つまり、アイヌとしての体毛の濃さや、彫りの深さ、肌の色という身体的特徴が差別を感じるきっかけになりやすいことを物語っているといえる。そういった被差別を感じる時、アイヌであることを自らが肯定的に捉えているのか、または否定的に捉えているのかによって、被差別経験としての語られ方は変わってくる。伊達調査において被差別経験がないという割合が高かったのは、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティが安定的にあるからという仮説も立てられる。しかし同時に、「眼差しの差別」が主観的なものであることに留意すると、「眼差しの差別」とはアイヌ自身によるアイヌ差別、すなわち民族内差別の場合にもあてはまると考えることも可能である。そうであるならば、アイヌであることを本当の意味で肯定的に捉えているかどうかの判断は慎重にしていく必要があるだろう。

注

- 1)アイヌ民族として調査対象となったのは47名であり、このなかにはアイヌの血を引く者が36名、アイヌの配偶者（和人夫／和人妻）としての立場が9名、アイヌの養子となった和人が2名含まれている。また、伊達市民調査のインタビュー対象者は33名である。
- 2)さらにいえば、彼女の住んでいた有珠は昔からアイヌ民族が数多く集住する地域であり、歴史的にみて有珠ではアイヌと和人が平和的関係を築いていたという大黒（1997）、大黒（1998）の知見と異なっている。この点については本章第3節のなかで検討する。
- 3)彼女の場合、「顔で判断される」との語りもあるように、幼少期から見た目によってアイヌだと蔑視されることが多かったという。父方は和人家系だが、母親は純血のアイヌ（祖父母より上もすべてアイヌの血筋）であることから、アイヌとしての血の濃さが影響していると推察される。
- 4)先の解釈をふまえ、東京（道外）では人ごみにまぎれてしまえばアイヌへの「眼差しの差別」は起きにくいと考えられる。
- 5)北海道農政部は北海道アイヌ協会と連携し、国の補助金の支援を受けながら、アイヌの人々に対する生活向上支援策の1つとして、「農林業生産基盤整備事業」と「農林漁業経営近代化施設整備事業」からなる「アイヌ地区農林漁業対策事業」を実施している（上山 2012:184）。ここでの語りは、「農林漁業経営近代化施設整備事業」による補助金の獲得をめぐるものであろう。た

だし、アイヌの方からの聞き取りによれば、この事業は施設整備に関わる補助事業なので、漁協の組合員であればアイヌ以外の者も含めて恩恵を受けることになるとのことである。ちなみに、新ひだか調査の際にも、「農林業生産基盤整備事業」をアイヌ以外の人にも波及効果があるので自治体としても積極的に利用したとの発言が旧三石町の元執行部経験者からあった。

6)血筋の告知については、別の視点から本報告書の第1章でも扱っているので参照されたい。

参考文献

濱田国佑, 2012, 「アイヌ社会における差別の問題——生活史から見る民族内差別」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 157-68.

掛川源一郎, 1988, 『バチラー八重子の生涯』北海道出版企画センター.

菊地千夏, 2012, 「アイヌの人々への差別の諸相——生活史に刻まれた差別の実態」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 143-56.

———, 2013, 「アイヌ差別の諸相——民族差別と民族内差別」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 38-50.

松本和良・石郷岡泰・太田博雄, 1995, 「現代ウタリ社会と差別・偏見——浦河町の社会調査を中心として——」『ソシオロジカ』20(2), 1-47.

小内透編著, 2012, 『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

———, 2013, 『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.

小野寺理佳, 2012, 「アイヌとジェンダー」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 61-93.

大黒正伸, 1997, 「ウタリ社会における文化葛藤の問題——伊達市の社会調査から——」『ソシオロジカ』22(1), 71-108.

———, 1998, 「ウタリ社会と文化的記憶の葛藤——伊達市の社会調査——」松本和良・大黒正伸『ウタリ社会と福祉コミュニティ』学文社, 162-99.

上山浩次郎, 2012, 「エスニックな社会運動への参加と意識——アイヌ協会がもつ生活上の意味——」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 183-93.

(菊地 千夏)